

近世後期庄内藩の預地支配（下）

本間 勝喜

六、江戸・大坂廻米と松前渡米

（一）

近世後期庄内藩預地のうち、明和六年（一七六九）より文化十二年（一八一五）までの通常預地の時には、年貢米は一部が石代金納の分として売払われるのを除けば、残りは江戸廻米や大坂廻米・廻糶にされたし、また松前藩に売渡すところの松前渡米にされた。

江戸廻米や大坂廻米について、やや後の文政年間（一八一八―三〇）頃のものとして推定される覚書に、

御預地御同様^②已前、江戸御廻米年々三、四千石宛被仰付、其間二壱ヶ年置大坂御廻米、納不足買納並右両所納名主人用等過分二相掛、難渋至極…

とあり、文化十一年（一八一四）度までの江戸廻米等は年々三、四千石ほどであったとする。江戸廻米ばかりでなく、一力年おきに大坂廻米もあった。その際は、江戸と大坂の二カ所に納名主が出張することになり、その費用が嵩むうえ、廻米された年貢米の欠減が多くなって、規定の容量に満たないために納不足となり、現地で不足分を買って納入する（買

納)費用も追加されて、百姓たちの負担が増加し難渋することになったとする。

庄内・由利幕領のうち廻米を行っていたのは田川郡五十力村であったが、寛政十年(一七九八)春の廻米の内訳は次のようであった。

一、江戸並大坂御廻米左之通^②

米四千百石 御廻米高

但、役所評議ニ四千貳百石迄之積ニ而江戸へ申遣候所、巳九月十九日四千百石ニ被仰出、十月四日申来

内貳千六百石余 江戸御廻米

同八百拾八石 大坂同断

同粉千貳百八拾三石 同所粉廻し

此代米六百四十壹石

内粉四百石余卯年申立、年延ニ相成候分、此度相廻ス分米ニ貳百石

米ノ千四百五拾八石余

この年の廻米高は四、一〇〇石であり、そのうち二、六〇〇石余が江戸廻米、八一八石が大坂廻米、それに粉一、二八三(米に直すと六四一石)が大坂廻粉であったが、大坂廻粉のうち四〇〇石(米で二〇〇石)は本来寛政七卯年に回粉するつもりであったが延期となっていた分であった^③。なお、預地役所での評議により廻米高を四、二〇〇石までの予定で幕府勘定所に伺い出たところ、四、一〇〇石に決定したことが知られる。預地役所の内規では、廻米高は江戸役所が毎年十月頃に伺い出ることになっていたようである。右の廻米高のほかに年々松前渡米もあった^④。

表1は、丸岡領落野目村(現酒田市)の年貢米の行き先を示したものである。判明する四十力年分のうち、江戸廻米があつたのは三十二力年であり、なかつたのは僅かに八力年だけであつた。それに対し、大坂廻米・廻粉があつたのは

十九力年であり、平均して二力年に一度程度の割合となっていて、先の覚書で一力年おきに大坂廻米があったとする記述が裏付けられる。

なお、大坂廻米十五回、大坂廻粉が十回で、一力年に両方が行われる年もあった。同じ大坂向けといっても、廻米の方が廻粉よりもやや多かったが、天明四年（一七八四）頃までは廻粉が主であり、それ以後は廻米が主となっていた。

つまり頻度や廻米量からみて、近世後期預地時代の落野目村など田川郡幕領の廻米は江戸廻米が中心であったことが確認される。

右のほか、松前藩に払下げられる松前渡米は毎年二、一六〇石（四斗八升入、四、五〇〇俵）と定っていたので、江戸廻米・大坂廻米などの分と合せると、当時は六千石前後の年貢米が、換金のために売払われることもなく、米俵のまま江戸など各地に向けられたのである。

因に、天明四年（一七八四）〜同八年まで一時期松山藩領に編入されていた落野目村には関係なかったが、他の村々では天明七年度に「神奈川領御蔵出米」の名目で江戸廻米のうちから一部が神奈川廻米にされたのである。

ところで、預地支配が開始されて一年足らずの明和七年（一七七〇）二月に、

一、皆御廻米被仰出候二付評議之事⁷

と、幕府勘定所より「皆廻米」するように命じられたので、預地役所でも評議したことが知られる。おそらく、定金納の分と松前渡米を除き、残りの年貢米をすべて廻米するということであろう。預地役所としても「皆廻米」の方針をできるだけ行っていくつもりであつたろうが、実際には定金納だけでなく、願石代納も年々許されて、「皆廻米」の方針はほとんど実現されなかったのである。村々の石代金納要求が強かったためであろう。安永六年（一七七七）頃にも幕府より廻米強化のことが命じられたのを受けて、預地役所はその旨を幕領村々に触れているのも、「皆廻米」がほとんど実現されていないことの現われといえる。それでも、幕府の寛政改革期の数力年は廻米強化が曲りなりにも実現されたの

年度	西暦	江戸 廻米	大坂 廻米・廻粉	松前 渡米	囲粉など	その他
寛政 5	1793	石 22.5000	石 3.4000	石 ・4.9500	石 16.0000	
同 6	94	36.0000			10.0290	
同 7	95	16.6000	2.0000	・1.8000	10.0290	
同 8	96	36.1000			10.0290	
同 9	97	4.9000	1.5000	・1.2000		御普請手当米60石
同10	98	27.3000			10.0290	
同12	1800	27.5000			10.0290	置米1.5900
享和 1	01	28.9000	7.2000		10.0290	
同 3	03	20.6000	6.8000		10.0290	
文化 1	04				16.1202	※囲粉6.2000
同 2	05	20.9000			10.6000	※囲粉6.2000 ※囲米6.2000
同 3	06	15.7000			10.6000	※囲粉6.2000 ※囲米6.2000 ※囲米11.4000
同 4	07	24.4000	2.8000			※囲粉6.2000 ※囲米6.2000 ※囲米11.4000
同 5	08	25.1000				
同 6	09	28.7000				
同 7	10	23.4000	2.4000			
同 8	11	9.0000	26.9000			
同 9	12	20.6000	3.1000			
同10	13		6.7000			※※不熟囲石6.7000
同11	14				蝦夷地廻米18.8000	

表 1 落野目村年貢米の行き先

年度	西暦	江戸 廻米	大坂 廻米・廻粉	松前 渡米	廻粉など	そ の 他
明和 6	1769	石 30.0500		石 10.3100		
同 7	70	31.6500		10.3100		
同 8	71	16.5000		・6.2000 10.3100		
安永 1	72	20.3000		10.3100		
同 2	73	14.4200		・3.0400 10.3100		
同 3	74	18.2000		10.3100	△3.8500	
同 4	75			・1.8500 34.5700		
同 5	76			34.6200	△3.8500	
同 6	77	6.8800		・2.8600 34.6200		
同 7	78	10.4000		11.4980		
同 8	79		6.2000	・2.6400 11.4980		
同 9	80	13.5000		10.6200		川除御普請扶持米28石
天明 1	81	8.7000	7.0000	・5.6400 10.3100		
同 2	82	21.9000		10.3100		
同 3	83		22.2800	14.3300		
同 4	84	18.4000	23.1000	・6.5000 10.3100		
同 8	88					(すべて金納)
寛政 2	90	38.2000		10.0000	貯夫食出穀0.0448	御普請置米32石8818
同 3	91	24.8000	2.8000	13.2401		
同 4	92	37.9000		10.0000		

注(1)各年とも「年貢皆済目録」(酒田市落野目文書)による。

(2)大坂廻米廻粉のうち・印は廻粉を示す。但、廻粉の場合も数量は米(五合摺)で換算されている。

(3)△印は廻粉が後に摺立てのうえ江戸廻米されたことを示す。

(4)※印は廻粉が後に石代金納になったことを示す。

(5)※※印は後に蝦夷地廻米となる。

である。しかし、寛政改革が終了すると、再び願石代納などが増加したのである。

預地時代の廻米に関して注目されるのは、村々より年貢米を川船によって酒田湊に川下げしたうえ、一旦保管する場所として、

御本領御錠蔵二指置候^⑨

というように、御米置場（瑞賢倉）を使用せずに、酒田湊にある庄内藩の米蔵に一旦搬入したようである。預地となった庄内・由利幕領が柴橋代官所の支配から分離したことで、御米置場を利用すべき場所がなかったためと思われる。

川下げされる年貢米の米拵え・俵拵えが不十分な場合が結構あったようである。安永六年（一七七七）十月に、川岸場で年貢米を川船の方に引渡す場合、規定より容量の少ない米俵については、その場で足し米をすることに郡中一統で決めていた。^⑩ 寛政三年（一七九一）八月の触れでは、春に行われた酒田湊での年貢米の吟味では、大山領の下川村（現鶴岡市）・尾花村（現三川町）、丸岡領の川尻村・平足村・鷺畑村（以上、現藤島町）・高田麦村（現余目町）の米拵えが良くなく、容量が不十分な村もあった。それに対し、丸岡領の大口村（現羽黒町）や丸岡村・備前村など丸岡四力村（現櫛引町、一部鶴岡市）では米拵え・俵拵えとも良かったという。そのうえで、改めて米拵え・俵拵えを良くして郡中一同が迷惑しないようにと指示している。

川船についても問題があった。安永七年（一七七八）四月といえ、年貢米の川下げが最盛期の時期であるが、

一、御廻米船酒田より滞り、村方より申出候事^⑪

というように、川船が予定どおりに村方に年貢米を受取りに来ないことから、村方より申し出たとする。天候などの事情で若干到着が遅れたりすることはしばしばあったであろうが、この場合はその程度のことではなかったとみられる。近世後期になると、赤川水系などで幕領村々の年貢米の川下げを担当していた酒田小船方の船頭たちが困窮し、順調に年貢米を積下げすることができないようになってきていたのであり、この時の遅滞もそんな事情が関わっていた可能性がある。

年貢米を積下げ中の川船の事故もあつた。寛政十二年（一八〇〇）四月十八日のこととして、

一、御預地木川・局・落野目三ヶ村御廻米酒田へ川下ヶ米於山居谷地辺二沈船二相成、御米百拾八表余皆濡二相成候段、出役梅木喜平次より申來、酒田船方之者弁米致候定之由二候¹⁴：

と、丸岡領の木川・局・落野目の三方村（いずれも現酒田市）の年貢米を酒田湊まで川下げしていた際、川船が山居谷地辺で沈没して米一一八俵余がすべて濡米になるという事故が起り、酒田出役中の梅木喜平次より預地役所に報告されたとする。このような川船事故の場合、庄内では船頭の方で弁償する慣行になっており、この場合も弁済されることになったのである。このような慣行により船頭がますます困窮することになったと思われる。

文化四年（一八〇七）四月八日には丸岡領の中村・興屋村・谷地館村（いずれも現羽黒町）の年貢米九十四俵が濡米になったので、やはり川船の船頭が弁済したのである。¹⁵

明和八年（一七七二）四月の年貢米川下げに際し、川船に立てる朱之丸ののぼりを流失するという事故もあつた。¹⁶また寛政八年（一七九六）のこととみられるが、丸岡領東堀越村で年貢米を保管している郷蔵を焼失するという事件があり、幕府勘定所に伺い出たところ、両名主は急度御叱り、長百姓は御叱り、番人両人は三十日の手錠が申渡された。¹⁷年貢米は百姓たちが弁済することになったはずである。

酒田湊に川下げされた年貢米は、前述のように藩の米蔵に入れられ、松前渡米の分を除いて、廻船の到着しだいに年貢米が積み込まれて、江戸や大坂に向けて廻米されることになる。なお、廻船がすべて酒田湊を出帆すると、預地役所から庄内藩家老中まで届け出るようになっていた。¹⁸そして藩より幕府へ報告されたはずである。

海上にある廻船に不正などが無いようにと監視する役として上乘が乗船したし、廻船が輸送した年貢米を幕府指定の米蔵に責任をもって速やかに納入するために江戸や大坂に納名主（納庄屋）が出張した。酒田湊にも名主が出役した。納名主や上乘等は預地の名主や百姓より選ばれた。郡中の推薦をうけて預地役所が任命したとみられる。明和九年（一七七二）の場合はつぎのような人々であった。¹⁹

酒田湊出役名主	播磨京田村名主	孫右衛門
同	東渡前村	名主 半四郎
大坂納名主	杉浦村	名主 新四郎 倅
		新三郎
江戸納名主	友江村	名主 豊右衛門
同	塩田村	名主 金五郎
大坂沖上乘	菖蒲沼村	名主 五左衛門 代
		喜左衛門
同	備前村	名主 庄右衛門
江戸沖上乘	栃屋村	名主 金三郎
同	鷺畑村	名主 嘉左衛門
同	平足村	百姓 藤左衛門

酒田湊出役名主が二名、大坂納名主が一名、江戸納名主が二名、大坂行き上乘が二名、江戸行き上乘が三名、合せて十名である。なお、大山領が四名、丸岡領が六名である。江戸廻米量の方が多かったため、人員も江戸向けが多かった。因に、江戸行き廻船が三艘、大坂行き廻船が二艘であったことになる。

この年に江戸納名主を勤めた大山領友江村（現鶴岡市）名主豊右衛門の場合、四月二十六日に庄内を出立し、五月九日に江戸に到着した。それより六カ月ほど江戸に滞在して、廻米されてきた年貢米を逐時幕府御蔵に納入することになり、ようやく終了して十一月九日に江戸を出立し、十一月二十五日に帰村した。²⁰七カ月に及ぶ江戸納名主の仕事だったのである。

因に、「年中定式」によれば、預地役人の酒田・江戸・大坂への出役者は毎年正月十一日に命じられることになっていた。²¹納名主の江戸・大坂滞在が越年となることもあったが、滞在が長引く第一の理由は廻船の事故などによる到着の遅れである。もともと廻船の空船が酒田湊に入津するのは三月中の定めであった。²²それであれば四月中に酒田湊を出帆して五、六月まで夏中にすべての廻船を大坂・江戸に到着させることが可能と考えられた。ところが空船の酒田湊到着が遅れば遅れるほど、しだいに海上が荒れることになり、年貢米を積んだ廻船に事故が起りやすくなるのである。海難事故が発生すれば、年貢米が濡米になったり、場合によっては年貢米の一部を海に投棄することになる。

明和七年（一七七〇）閏六月に、預地の年貢米を積んだ廻船が能登で難船したので、預地役人で江戸役所駐在の池田久平と差添の石井多右衛門が出張した。ところが、同じ廻船が丹後宮津で再び難船したので、今度は服部弥惣と差添の石井多右衛門が出張した。²³新暦では八月に入っていたとも考えられ、かなり日程が遅れていたのである。安永元年（一七七二）には、預地の年貢米と尾花沢代官所付き村々の年貢米を積合せし東廻りした廻船が房州沖で難船したので、江戸滞在中とみられる預地役人の仙場松兵衛が房州柏崎（現千葉県館山市）に出張した。²⁴房総半島の辺りは海難事故の多いところであった。天明五年（一七八五）六月にも預地の年貢米を積んだ廻船が破船したようであるが詳細は不明であ

る。この他にも事故は結構あつたであろう。

事故が無くとも、廻船の江戸・大坂到着の期日が遅れると、年貢米に欠減や更米などが多くなり、幕府御蔵に納入するに際し、規定の容量や重量に満たず、補填用として予め準備していった欠米を加えても足りず、不足の分を現地で買調えたうえ、改めて年貢米を御蔵に納入することになる。それだけ納名主の出張が長引き費用が嵩むうえ、買納した分の代金も百姓たちが追加して負担することになる。

地方文書の「御用留」や「村入用帳」などにも廻米納不足金の村々への割当に関する記事がしばしばみられる。明和九年（一七七二）辰九月の下余目七力村組「卯御年貢米辰江戸御廻米納不足金割付帳²⁶」では、

九月十六日申来　卯御年貢

一、金貳百五拾両　江戸納不足

此割高御廻米貳千七百貳拾四石

此法九壺七七七

一、永貳貫九百四拾七文九分　高田麦村

一、永壺貫九百七拾九文六分　杉浦村

一、永壺貫貳百九文六分　深川村

一、永貳貫八百五拾文六分　局村

一、永三貫八百拾壺文五分　木川村

一、永壺貫五百拾四文三分　落野目村

一、永三百七文五分　大宮村

永拾四貫六百貳十壺文

此金拾四兩貳分・永百廿壹文

一、永貳貫九百四拾七文九分 廿六木村

とあり、明和八卯年の年貢米を翌九辰年に江戸廻米にしたところ江戸納不足金として金二五〇兩が生じたことから、江戸廻米高二七二四石で除し、廻米百石につき永九一七文七分七厘の割合で田川郡五十力村より取立てることになり、丸岡領下余目七力村及び廿六木村（現余目町、上余目八力村組）に対しても割当てられたものであった。その後も、安永六年（一七七七）九月に「江戸納不足」金の割当てがあったし、翌安永七年十月に「江戸・大坂御廻米納不足」金の割当てがあった。また天明元年（一七八一）十月にも「江戸御廻米納不足」金の割当てがあり、翌天明二年には「大坂納不足」金の割当てがあった。²⁸ 納不足が年々のようにあったわけである。

ところが、寛政改革が行われると、逆に寛政四年（一七九二）八月には「当春江戸・大坂御返り金」²⁷、同五年九月には江戸御廻米の際の「過納之分村々江割返」金、²⁸ 同六年九月には「当春江戸・大坂御廻米入用過金」²⁹ というように、主として欠米の一部が残ったことによるが、廻米費用の一部が村々に返却されたのである。

これらは、寛政改革の一環として「御廻米御藏納仕法」の改正が行われたことによる。すでに天明二年（一七八二）十月の申渡にも、³⁰

向後空船差向方手廻いたし相改、北国筋ハ翌春二月中迄ニ長州下ノ関迄差向、海上次第可成丈早速積所江差下候積：と、空船の差向時期を早めることを励行させて海難事故の発生や欠減の多発を避けようとしたのである。また廻船差配人苦屋久兵衛らによる船中欠請負をはじめとする諸廻米請負や蔵納請負を中止させて、「定例廻し」³¹ ということで積所での年貢米の升改め等を厳格にしたことである。これらが、一時効果をあげたものと考えられる。

しかし、寛政改革期を過ぎると、例えば寛政九年（一七九七）十月には「当已御廻米粉江戸納不足金」³² が発生したように、以後納不足金の発生はしばしばみられるのに対し、廻米費用の割返し等はほとんどみられない。寛政改革で改訂

された仕法が直ぐに守られなくなったためであろう。

出羽幕領のうち田川・由利両郡村々に対しては年々松前渡米が割当てられた。毎年四、五〇〇俵（四斗八升入）で石高に直すと二、一六〇石であったが、松前渡米については松前藩が酒田湊まで受取りに來たので、村々の負担が極く少なくて済み歓迎されたのである。落野目村の場合、松前渡米はほとんど十石余りに固定していたが、年によりかなり多い割当てがされることがあった。これは由利領村々が不作などで慣例どおりの割当てに應じられない場合、代わりにその分を田川郡村々が割増しして応じたためである。

ところが、文化四年（一八〇七）度より田川・由利両郡村々に松前渡米が割当てられないことになった。蝦夷地全島が上知となり、幕府の直轄支配になったことから、松前渡米が廃止となり、代って蝦夷地廻米（松前用米）が始まり、その際に、同じ出羽幕領とはいえ、村山郡・置賜郡に割当てられることになったためである。³⁷ なお、蝦夷地廻米となり、以前の松前渡米とは異なつて、江戸・大坂廻米と同様の扱いとされ、百姓たちの負担で蝦夷地まで廻米されることになったことから、幕領村々の負担はかなり増すことになったはずである。それでも江戸廻米に比べると蝦夷地廻米（松前用米）の方が負担が少々なりとも軽いと考えられたためか、田川郡幕領村々は文化五年（一八〇八）十月に次のような歎願をした。

乍恐（以）書付奉願上候御事³⁸

出羽国田河郡米納付村々江戸廻米之儀、田河郡ハ一体米性不宜処、同国酒田湊より江戸江海上凡七、八百里茂在之、其上難渋之場所多数日相掛、品川江着船仕候二付更米二相成、御藏納之節年々過分之欠石相立買納仕、出役名主長逗留二相成、諸入用茂多相掛リ百姓困窮歎敷奉存候、依之奉願上候、右御廻米之分松前御用米御座候ハ、最上御代官所同様年々御用米被仰付被下置度奉願候、若御用米無之節者大坂表江ハ海上凡四百里在之、過分之欠石相立不申候二付、別段之御沙汰ヲ以年々大坂御廻米被仰付被下置度奉願候：

すなわち、江戸は大変遠いので年貢米の廻米にも多くの欠減が生ずることになるので、村山幕領と同じに松前用米

（蝦夷地廻米）を年々命じてほしいが、もし松前用米が命じられない場合には江戸に比べるとはるかに近く欠減のあまり生じない大坂廻米を命じて欲しいと歎願している。なお、宛先は単に御役所となっているが預地役所宛であろう。その希望の一部が叶えられたものか、文化八年に、明年より江戸廻米はなく、以後大坂廻米三千石を行うことが命じられた。³⁹ その廻米に関連して、寛政改革で一時中断していた船中欠請負が文化八年に復活することになった。⁴⁰

松前用米の方も預地役所が幕府勘定所へ働きかけた結果がようやく現われたのか、預地村々に対し文化十一年（一八一四）度に蝦夷地廻米が課されたが、偶々翌文化十二年十二月に庄内藩に預地に対し私領同様取扱いをする事が許されたので、以後は江戸・大坂廻米はもちろん蝦夷地廻米も行われなかったことになったのである。⁴¹

年貢米の一部が種々の理由で囲米や置米などになって、しばらく村方に保管し、直ちに廻米されないこともあった。落野目村の場合、⁴² 安永三年（一七七四）度と同五年度に米三石八斗五升ずつが囲籾となったが、これらは二、三年して摺立てたうえ江戸廻米とされた。また文化年間（二八〇四—一八）に入ると米価が低落し、そのため江戸・大坂への廻米量を押さえるために囲籾・囲米が命じられたが、この分は大部分が後に石代金納になったし、一部が蝦夷地廻米となった（表1を参照）。

なお、落野目村は最上川に面していたので、最上川の川除御普請などに際し、年貢米の一部が扶持米・手当米に向けられることもあった。

七、石代金納と皆金納

(一)

幕領においては近世前期より年貢の一部を石代金納することが定法となっていた。しかも、山村で米が収穫できないなどを理由に皆金納の村もあった。庄内藩の預地でも、⁴³⁾

一、田河郡・飽海(郡)・由利郡三郡高^々貳万九千貳拾八石八斗五升七合九勺^才

内五千八百拾八石八斗五升七合九勺^才 是ハ皆金納高也

右小内五千七拾壹石九斗七合六勺^才 余目領十五ヶ村ノ分

七百四拾六石九斗五升三勺 上余目組之内七ヶ村ニ而

と、庄内・由利幕領の高二万九、〇二八石余のうち二割ほどに当たる高五、八一八石余が皆金納となっていた。皆金納のうち高五〇七一石余が余目領十五力村(天明元年より十四力村)の分であり、余目領では本年貢の皆金納は正徳三年(一七一三)以来のことで「永皆金納」制であつた。⁴⁴⁾ 残り的高七四六石余は丸岡領のうち最上川周縁に位置する上余目八力村組のうちの七力村のことである。平場ではあるが、用水の便がない畑作の村であつたので、享保二十年(一七三五)頃に幕府代官所に出願して許可された皆金納であつた。年季付の皆金納だったので、年季明ごとに年季切替を行い皆金納を継続してきたものであつた。⁴⁵⁾

「永皆金納」制の余目領の石代値段は、出羽五ヶ所上米平均値段に対し金一両につき三斗高という出羽幕領の定石代値段によるものであつた。ところが、村方よりの出願によるためであろうが上余目七力村の場合は平場にもかかわらず、

「山方金納値段」の名目で出羽五カ所上米平均値段に対し金一両につき三斗五升高であった。つまり、隣接している村々ながら同じ皆金納とはいっても余目領よりも上余目七カ村の法が金一両につき五升だけ高い石代値段に設定されていたのである。右のような皆金納の村々を除いて、残りの村々（田川郡五十力村）は年貢米を江戸や大坂へ廻米するなどととも、年貢の一部を換金して年々石代金納したのである。なお、由利領（十一カ村）の場合は、定金納の分を除く、残りの年貢米は原則として松前渡米になったのであり、江戸・大坂廻米は行わないことになっていた。⁴⁶⁾

田川郡五十力村の場合、年々必ず石代金納さ

れる定金納の分は本年貢の一四パーセントほどに当たった。十八世紀前半の享保改革期には、石代金納は原則として定金納のみであり、残りの年貢米は松前渡米のほかをすべて江戸などに廻米する方針がとられたが、十八世紀中頃の宝暦年間に入ると、凶作や悪米などを理由に廻米に向けられるべき年貢米の一部が恒常的に願石代納されるようになり、石代金納の分が増加するようになった。預地となる明和年間（一七六四―一七七二）には、石代金納の分が年貢の過半を越えるようになっていたので、石代金納率も五〇パーセントを超えた（表2参照）。

田川郡米納五十力村は預地支配が始まって早々

表2 石代金納率（丸岡領）

年 代	西 暦	落野目村	廿六木村	年 代	西 暦	落野目村	廿六木村
明和 6	1769	57.9%	57.8%	寛政 5	1793	51.6%	48.9%
7	70	56.2	56.1	6	94	52.5	49.8
8	71	65.7	65.7	7	95	68.6	66.9
安永 1	72	68.0	66.7	8	96	52.2	49.8
2	73	71.0	70.4	9	97	29.9	49.2
3	74	66.2		10	98	61.3	59.3
4	75	62.0		11	99		58.9
5	76	59.9		12	1800	59.4	57.4
6	77	53.1	53.8	享和 1	01	52.2	
7	78	76.9	77.1	2	02		
8	79	78.5	78.8	3	03	61.2	59.3
9	80	44.9	74.2	文化 1	04	76.9	76.3
天明 1	81	66.4	66.1	2	05	54.5	52.9
2	82	66.0	65.6	3	06	48.1	46.3
3	83	61.3	61.0	4	07	46.0	45.5
4	84	40.7	29.4	5	08	73.9	73.2
5	85		72.8	6	09	70.1	69.3
6	86		70.4	7	10	73.1	72.4
7	87		43.7	8	11	62.3	
8	88	100	36.6	9	12	75.1	74.9
寛政 1	89		48.2	10	13	85.9	
2	90	17.5	47.8	11	14	80.1	80.1
3	91	58.1	55.5	12	15	71.4	
4	92	50.9	47.9				

注(1)各年度とも年貢皆済目録(酒田市落野目文書、余目町廿六木文書)による。

(2)空欄は不明を示す。

の明和六年（一七六九）八月に安石代値段による願石代納願いをしたが許可されなかった。⁴⁷ 預地役所としても預地支配の当初からあまい取扱いはできなかったものであろう。

前述のように明和七年二月に幕府勘定所より「皆御廻米」のことが命じられていたが、石代金納が年貢の過半を占める状態がその後十数年ほど続いた。

この場合も預地役所を通じて幕府勘定所に願ひ出て、その許可をうけているのである。しかし、幕府が寛政改革の一環として廻米強化の方針をとったことにより、天明七年（一七八七）から寛政九年（一七九七）頃まで十年余りは石代金納率が五〇パーセント以下に割込んだが、寛政十年以降は再び石代金納率が五〇パーセントを超えるようになった。特に、十九世紀初めの文化年間に入ると石代金納の率は年貢の七〇パーセントを超えた。因に、文化二年（一八〇五）〜同四年の間に石代金納率が低下しているが、これは低米価により年貢米の一部が村方に囲米することを命じられたことによる。⁴⁸ もっとも、この分は二、三年してほとんど石代金納されたので、実際には石代金納率は高位で維持されたことになる。

預地となつて間もない明和六年（一七六九）九月に預地村々は、雪国のことであり毎年四月頃までは他国からの商船が通つてこないのを、米の売買が成り立たないとして、石代金納の皆済月を春中ではなく七月中に変更するように歎願した。⁴⁹ 皆済月は享保改革期には三月頃に繰上げられていたが、宝暦年間（一七五一—一七六四）になると五、六月頃に繰下げられる傾向にあつたものの、庄内藩預地の開始に際し、村々は七月を皆済月とすることの制度化を要望したものとみられる。右の要望があつてか預地時代の石代金納の徴収月は次のようであつた。

一、御年貢金取立之次第

九月、十一月、翌三月、四月、五月、六月

右のように六回に分納するのであり、翌年六月が皆済月となつていた。因に、幕府の規定では、勘定所に納入する皆済月が、出羽国は七月となつていた。⁵¹ そのため、六回にわたつて徴収した年貢金は十二月、翌三月、五月、六月の四回に分けて

江戸に運ばれて、例えば寛政十年（一七九八）七月の場合、一括して掛屋に引渡されたとする。一旦掛屋に渡して金高はもちろん金種や疵の有無などについて改めたうえ幕府に納められたものとみられる。⁽⁵³⁾ 掛屋は大坂屋治兵衛という商人だったとみられ、庄内藩では預地支配の当初から江戸に送られた年貢金を藩邸の土蔵に納めず、大坂屋に預け、そこから幕府勘定所に上納してきたのであったが、享和二年（一八〇二）に上納に差問題から預地勘定役二人が取調べられる事件が起った。⁽⁵⁴⁾ 因に、村々が年貢金を納入する場合、九月、十一月の納入額は毎年定っていたので、預地役所や預地御用達らは特に触れを出さない慣例になっていたようである。年を越えた三月～六月の四回の分は年々年貢金の変動することから預地役所等では廻状を出して、その金額と納入期日を知らせて厳守させたのである。⁽⁵⁵⁾

(11)

預地村々は六回に分納される年貢金を納入期日に遅れることなく上納するために、郷蔵に保管されている年貢米の一部を随時売払って換金する必要があった。買付けたのは多くは鶴岡・酒田・加茂等の商人や大山村の造酒屋などであった。村によっては販売先がある程度固定していることもあり、丸岡領和名川村（現藤島町）では、十九世紀初めの文化頃に酒田船場町の問屋佐治兵衛に売って換金していた。⁽⁵⁶⁾

ところで、例えば丸岡領落野目村の天明八年（一七八八）「御年貢（米名寄取立帳）」⁽⁵⁷⁾では、百姓次郎左衛門（持高二〇石四斗八升三合五勺）の年貢出方の内訳は次のようである。

取米合七石三斗四升七合七勺

一、米七斗三升四合八勺 拾分壹金納引

残六石六斗一升二合九勺

一、米三斗六升三合七勺 欠代米

一、同五升五合三勺 御六尺宿役給米

一、同七升六合四勺 壹升御口米

一、同二斗二升九合三勺 三升御口米

一、同二斗二升一合 名主給米

惣々七石五斗五升八合六勺

此表拾八表⁽⁸⁾三斗五升八合六勺 次郎左衛門出方

取米合（本年貢）から十分一金納（定金納）の分を引いて、その残り米に高掛物、口米、名主給米を加えて惣出方を算定している。このことから、定金納の分は個々の百姓が自身で換金して納入することを前提としていと考えられる。もともと年貢米を納入する期限は毎年十二月十日になっていたので、郷藏に納入された年貢米を売払って年貢金を上納するにしても、九月・十一月の両月分の上納には到底間に合わないことになる。従って、個々の百姓たちがそれぞれの定金納の分を九月か十一月までのうちに納入することの方が便宜だったように思われる。しかし、本当のところは個々の百姓が自身で納入するのは九月分だけと考えられるが、多くの百姓はこの時点で上納することができなかったため、書類の上ではともかく、九月の徴収は行わず、実際には十一月以降の五回上納となっていた可能性⁽⁵⁸⁾がある。しかも、十一月分は村方で立替え上納するのが慣行となっていたのである。

例えば、大山領角田二口村（現三川町）の天明八年（一七八八）十一月「申御年貢米未進帳」⁽⁵⁹⁾では、江戸廻米・松前渡米など年貢米のまま向けられる分を除いて、

さし引残百四拾式表式斗七升六合

此代五拾八両永四文壹分 両かへ五々六百六十文かへ

庭渡廿四表六分かへ

一、金拾七両三分 申十一月拾七日上納

一、同壹両三分・永七拾七文貳分 五月迄利足

一、同拾両 三月十七日上納

一、同壹分・永百九拾壹文貳分 同断利足

一、金拾四両壹分 五月十六日上納

一、同三両貳分・永貳百貳拾五文八分 六月五日上納

とあり、角田二口村では天明八年度の石代金納の分として、年貢米一四二俵貳斗余を売り代金五十八両余を得て、十一月以降の年貢金上納に向けたことになる。ところが、前述のように他国の商船が庄内に米を買付けにやってくるのは四月頃のことであり、そのため酒田・加茂などの商人と年貢米販売に関して取組みをしても、実際に村方に代金が支払われるのは五月頃のことであつた。少なくともそれが慣行となっていたようである。そのため、五月・六月の二カ月分の年貢金は年貢米の代金から上納することができたが、それ以前の分の十一月・翌三月・四月の三カ月分の上納には間に合わないで、村方で金子を才覚して上納しているのであり、それぞれの月での才覚金に對しいずれも五月までの利足が右の米代金のうちから支払われていることが知られる。つまり、それらの才覚金が五月の米代金で精算されたのである。

それ等の金子を融通した者であるが、角田二口村は村内に豪農で造酒屋を営む佐藤東藏家があり、例えば、寛政七年（一七九五）の場合、

金主東藏 十九表かへ

一、金拾七両三分 十一月二十五日上納

此利四拾四匁三分七厘五毛 二ヶ月ノ利

此米三拾四表式斗式升七合三勺 東藏未進二入ル

というように、角田二口村では十一月分の年貢金として東藏より金十七両三步の融通を受けて上納し、その二カ月分の利子を含めて米三四俵二斗余の年貢米を向けることにし、実際には翌年分の年貢米取立の際に精算するつもりであったことが知られる。また、東藏家の記録に寛政十一末年の場合、^⑤

未十一月二十五日 申四月切

一、金拾三両 廿一 二口 名主専助

十分一金納

金拾三両済 申閏四月二十四日

利金壹両拾三匁七分五厘済 同日

ともあり、東藏家では名主専助に対し、「十分一金納」の分として金十三両を「二十両一步」の利率（年利率一割五分）で翌四月限の約束で十一月二十五日に貸付け、今度は翌年閏四月二十四日に元利とも返済を受けたことを示している。いずれも、少なくとも十一月分の年貢金については佐藤東藏家よりの融通を受けて上納していたのであった。

もちろん、村内に年貢金を融通できるような富家がない場合は、近隣の豪農や鶴岡・酒田などの商人等から融通を受けることになったし、困窮が著しいなどで融通先が確保できない村には兼子儀右衛門など預地御用達が融通を行うことがあった。⁶² 右のような年貢金納の事情に通じていた者の出願であるうが、大坂商人を金主にして、明和九年（一七七二）十月に預地役所に対してとみられるが、次のような願書を提出した者がいた。庄内の商人であろうが、出願者の名前は不明である。

申上候口上之覚⁶³

一、御料御郡中諸金納米御払石二被成、以前八借用ヲ以御上納被成候、依之右払石年々拙者共方へ御払被下候而、右利足金等御用立申度候、尤御米値段之義ハ来三月、四月中旬迄御払被成候様合ヲ以…右直段相立候迄借用百両二

付耆ヶ月二耆両之利相加申候積り、其後御上納之度々御米代金御入用次第十日已前被仰付候得ハ何様成共少も無
遲滯急度差上可申候：

これによれば、石代上納分の年貢米を買付ける一方、四月上納の分までは低利で立替え、それ以後の分は納入期日に間に合うように十日以前に渡すという内容であるが、預地役所の公認を得ることで、できれば預地全体の分を一括して取扱いたいということであつたとみられる。しかし、預地役所はもとより村々の受入れるところとならなかつたようである。ともかく、預地村々の石代金納向の年貢米を取扱うことが有利な商機とみなされていたことの表われといえる。

右のように預地村々は年貢米の一部を売払つて、その代金から年貢金を上納したのであるが、米価の変動などにより予定どおりに売ることができない場合もあつた。「売損」と称した。例えば、丸岡領上中野目村（現藤島町）で享和二年（一八〇二）八月に石代値段を書上げているが⁶⁴、

五ヶ所平均直段

金耆両二付

米耆石三斗六升四合九勺五才 畑方定金納直段

金耆両二付

米耆石式斗式升八合四勺耆才 三升御口米直段

村払米平均直段

金耆両二付

米耆石六斗五合八勺

と記されており、定金納（定石代）値段が金一両につき米一石三斗六升四合九勺五才なのに、村で売払つた際の平均値段が金一両につき一石六斗五合八勺である。本當にこの通りとすれば金一両につき二斗四升ほどの売損をしたことにな

る。実際に売損金が出た場合には、その分を村民や入作者が追加で負担することになる。大山領角田二口村佐藤東藏家の「大福帳」類には例えば、文化七年（一八一〇）七月のこととして、⁶⁵

一、同（錢）百九拾四文 面野山村已御年貢売損

と、出作地のある同領面野山村（現鶴岡市）に売損金が発生して、東藏家でも追加負担させられたことが知られる。低米価の文化年間をはじめ、結構売損金が発生したようである。

売損金どころか、村によつては期日まで年貢金を上納できないこともあった。例えば、明和八年（一七七二）のこと、
…当皆済金納、鷺畑村・上中野目村・平足村上納及未進候二付、為百姓惣代 名主・組頭・長百姓共手錠代屋預ケ申付候：⁶⁶

と、丸岡領鷺畑村・上中野目村・平足村（いずれも現藤島町）では七月までに年貢金を皆済できなかったため、村役人たちが手錠のうえ庄内藩の代屋（郷宿）預けになったのである。預地役所では年貢金未進の原因等について、

畢竟藏封無之郷藏江米納方不宜、御年貢皆済已前百姓任勝手、私之借物等相返取散候故之儀二候間、当卯年より右三ヶ村江役人差出、藏入米員数並米性等相改見届致封印：⁶⁷

と、年貢米を郷藏に納入したとしても、郷藏に封印をしておらず、年貢米の保管状態が良くなく、本来に郷藏に完納していたかも不明であるとする。それに、百姓たちは年貢米皆済以前に私的な借米などを返済することから、いずれにせよ年貢米が不足したのだとして、今後は預地役人が立会つて年貢米の郷藏納入を厳密に行うとともに、封印をして百姓たちが勝手に出入できないようにするというのである。

右の三力村の年貢金未納のことをうけて、預地八十三力村全村の名主が預地役所に呼び出されて年貢米の郷藏納入等について厳重な注意がされ、それにつき各村より請書を提出させたのであった。⁶⁸ 安永三年（一七七四）四月には播磨京田村（現鶴岡市）でも年貢金未進事件が起つた。同村は長らく難渋の村方であつたし、⁶⁹ 預地御用達も設けられて年数が

浅かったことであり、結局、年貢金を融通する者が現われなかったことが考えられる。

注

- (1) 十月「覚」(鶴岡市郷土資料館湯野浜地区文書)
- (2) 「類例記」一(右同館伊藤家文書)
- (3) 大山領千安京田村(現鶴岡市)の場合、寛政七年「粃拾壹石四斗 去ル未置粃申引替粃」とあり、この分がおそらく廻粃される予定であつたが、何故か延期されていたものとみられる(千安京田文書)。
- (4) 「類例記」一
- (5) 拙稿「庄内幕領における松前渡米」(拙著『近世幕領年貢制度の研究』第六章第一節)
- (6) 天明八年九月「出羽国田河郡去未江戸御廻米内買納諸入用其外共勘定仕上帳」(鶴岡市郷土資料館大山地区文書)
- (7) 「御預地向手扣」(余目町・故高橋正雄氏所有文書)、「類例記」一
- (8) 安永六年八月「不作二付惣郡中連判願」(安永二年十月ヨリ「御用願書一件扣帳」鶴岡市郷土資料館二口文書、及び『三川町史資料集』第五集一六一頁)
- (9) 「類例記」一
- (10) 安永六年八月ヨリ「御用留帳」(酒田市局・池田家文書)
- (11) 寛政三年八月ヨリ「御用記」(局・池田家文書)
- (12) 「類例記」一
- (13) 酒田小船方の困窮化については横山昭男「庄内藩の蔵米輸送と酒田川船仲間の研究」(柚木学編『日本水上交通史論集』第一巻)を参照されたい。
- (14) 「類例記」一
- (15) 「類例記」三(伊藤家文書)、「御預地向手扣」
- (16) 「御預地向手扣」
- (17) 「御預地向手扣」
- (18) 「御預地向手扣」
- (19) 『大山町史』一七九頁

- (20) 「江戸逗留中御用留並日帳」(鶴岡市友江文書)
- (21) 「御預地向手扣」
- (22) 石井謙治「西廻りによる出羽国江戸城米の廻送について」(福井県立図書館他編『日本海海運史の研究』)
- (23) 『酒田市史料篇』(四) 四七四・四七五頁
- (24) 『酒田市史料篇』(四) 四七五頁
- (25) 「類例記」三
- (26) 酒田市局・今井家文書(酒田市立光丘文庫)
- (27、28) 安永六年八月ヨリ「御用留帳」(局・池田家文書)
- (29) 天明元年八月ヨリ「御用留帳」(局・池田家文書)
- (30) 天明二年十一月「郡中並四ヶ領京田割指引諸色割」(二口文書)
- (31) 寛政四年九月ヨリ「御用留帳」(局・池田家文書)
- (32) 寛政五年八月ヨリ「御用留帳」(局・池田家文書)
- (33) 寛政六年九月ヨリ「御用留帳」(局・池田家文書)
- (34) 『牧民金鑑』上巻五〇二頁
- (35) 『牧民金鑑』上巻五二二頁、「寛政二戊年新規定例廻被仰渡書」(『寒河江市史編纂叢書』第十二集一二七頁)、なお船中欠請負については拙稿「近世中後期出羽幕領米の船中欠請負」(『交通史研究』第二十五号)を参照されたい。
- (36) 寛政九年八月ヨリ「御用留帳」(局・池田家文書)
- (37) 拙稿「庄内幕領における松前渡米」、同「近世出羽幕領の松前渡米」(村上直編『日本海地域史研究』第十四輯)
- (38) 文化五年七月ヨリ「日紀事」(二口文書)
- (39) 「文化八年辛未記」(『三川町史資料集』第十四集)、なお、文化九年度にも江戸廻米があった。
- (40) 『三川町史資料集』第二集一二九頁〜一三二頁
- (41) 拙稿「庄内幕領の『酒田御藏納』」(東北公益文科大学『総合研究編集』1)
- (42) 各年度とも「年貢皆済目録」(酒田市落野目文書)による。
- (43) 「余目領町村助右衛門覚書」(余目町字町・故佐藤東一氏所有文書)
- (44) 拙稿「余目領の『永定免皆定金納』制」(拙著『近世幕領年貢制度の研究』第三章第三節)

- (45) 拙稿「最上川下流周辺農村の農業と年貢」(拙著『近世幕領年貢制度の研究』第七章第二節)
- (46) 拙稿「近世中後期由利御領関村の年貢収納」(本荘市文化財保護協会『鶴舞』第七十二号)、同「松前渡米」(日本私学教育研究所『紀要』No三五―二)
- (47) 『三川町史資料集』第五集一〇七頁
- (48) 寛政六年正月ヨリ「御用留」(二口文書)
- (49) 「余目領町村助右衛門覚書」
- (50) 拙稿「正徳―享保年間、大山御料湯野浜村の年貢収納」(『山形県地域史研究』第二十三号)
- (51) 「御代官極秘」(『山形市史編集資料』第二十二号九七頁、及び村上直校訂『江戸幕府郡代代官史料集』一八八頁)
- (52) 「御預地向手扣」
- (53) 寛政八年九月ヨリ「御用留」(余目町南野文書)
- (54) 「大泉叢誌」卷之八十二(鶴岡市郷土資料館)
- (55) 「年中定式」(『御預地向手扣』)
- (56) 『中川史』一六二頁
- (57) 落野目文書
- (58) 例えば、角田二口村の豪農佐藤東藏家の場合、文化三年正月ヨリ「大福帳」(二口文書)によれば、文化頃には自村分及び他村出作分とも定金納分の「十分一金納」を納入するのは例年十一月中のことである。
- (59) 二口文書
- (60) 寛政六年正月ヨリ「御用留」(二口文書)
- (61) 寛政十一年ヨリ「大福帳」(二口文書)
- (62) 拙稿「近世後期庄内藩預地の御用達」(東北公益文科大学『総合研究論集』3)
- (63) 安永二年正月ヨリ「御用願書留帳」(二口文書)、『三川町史資料集』第五集一二八・一二九頁
- (64) 「覚」(藤島町大字上中野目・富樫家文書)
- (65) 文化三年正月ヨリ「大福帳」(二口文書)
- (66) 「差上申御請書之事」(余目町大字中堀野文書)
- (69) 拙稿「近世後期大山領播磨京田村の年貢未納と名主立替えをめぐる」(『山形史学研究』第三十二号)